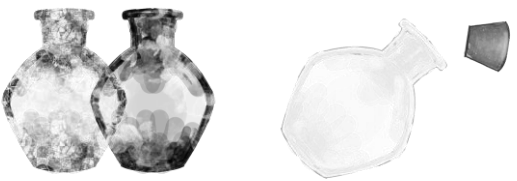

ナカハラ幹部と3ばいおさむくん

！あてんしょん！
この本の中也は太宰をこじらせてファンクラブを作っています。
この本の太宰は色々開き直って中也のことが大好きです。

俺は、おまえの顔が好きで、顔が見えなくても声が好きで、声が聴こえなくても手が好きで。
まるで死角なく惚れている。会えない間も面影だけで想い続けていられたくらいには、推しているのだ。太宰治という男を。誰よりも、俺が。
「太宰…んん…やめ、っあ…朝、だっ…」
「んー……まだいいでしょ。出かける時間まで、しようよ」
中也があったかいのがいけない。そう言って、横を向いて寝ていた俺の背中に身体を密着させ、パジャマの釦を外し、はだけた裸の胸に手を這わせてくる。その手の平と後ろから押し当てられた体温の方がよほど熱くて、息をのんだ。
「あん…だけ、したのに、まだ足りねぇのかよ…」
つい、とパジャマの襟をつままれて、子供が悪戯するみたいにうなじを舐められる。はぁ、と洩れ出た自分の息も熱い。そのまま耳たぶを口の中に含まれて、足りない、と囁かれた。
「あ、うぅ…」
太宰の声は、的確に俺を陥落させる。頭の中で組み立てていた朝食の献立が、どろどろに溶けてなくなった。兆した性器を布越しに撫でられて、簡単だなぁ、とからかわれる。
「弱いと分かってて責めるなよ」
「弱点が分かってるのに、責めない方が馬鹿でしょ？」
いつからこんなになってたのかなぁ、と人の乳首をいじくりながら呟く声が嬉しそうだ。

「ん……ん、っ、あぅ……ッ、ん、やだ、って」
熱い手の平が何もない胸を揉み、乳頭をくりくりと摘まんで捏ねる。ちりちりとした痛痒い感覚に身を捩るが、後ろからしっかり抱き込まれていて逃げられない。ふぅ、ふ、と呼吸が乱れて、時折爪を立てられると、勝手にびくんと肩が跳ねて、甘ったるい声が出た。
「私が組織を抜けて、割とすぐだよね？　君があの変な集まりを作ったの」
やっと乳首から離れてくれた指が、今度は吐息で濡れた唇を開いて口内に押し入り、二本の指で舌を挟み込んで扱く。質問されているが、別に答えなくても良いらしい。こういうところが嫌なんだよなぁ、としみじみ思いながら、それと同じくらい、たまらないと思った。
「変な集まり」と太宰が言っているのは、「おさむくんファンクラブ」のことだろう。四年前に太宰がポートマフィアを離反したとき、太宰が映っている画像や映像データを隔離するための見分作業を首領から任された。軍警の目に触れぬようにするためだ。当時、深刻なおさむロスで自失状態に陥っていた芥川も引き入れ、二人で仕事の合間を見つけては太宰治観賞会をしていたうちに、太宰治を推すという目的のクラブが発足していたのだ。
太宰は俺が作ったと言ったが、どちらかというと、おさむロスの同士に声をかけているうちにクラブの形に育ったと言う方が似つかわしい。人数が増えたら俺の執務室で鑑賞会を行うのは手狭になったし、日程調整も煩雑になってきて、会場やら連絡用の専用ラインやらを整えていったら、月に二回の会合と忘年会と新年会もある立派なクラブになっていた。
「っぷは、」
ちょっとふやけてしまったのではないかと思うほど、べしゃべしゃに濡れた太宰の指が俺の舌から離れていく。中途半端に膝裏までズボンを降ろされて、その指が後ろに入ってきた。

「あ、……ぁ、んう、うーー……っ」
異物感に、ぶるぶると肩が震える。まだやわらかいや、とまるで砂遊びでもしているかのような無邪気な声で言いながら、気持ちいいところをすぐに見つけてぐにぐにと押してくる。
「ああっ、…〜〜〜っはあ、あっ、い……」
「昨日もっと太いのでさんざん奥まで突いてあげたのに、こんな指なんかでもちゃんと気持ちよくなれるんだもんね。よしよし中也、いいこいいこ」
どこをいいこいいこしてんだ、どこを。顔以外をぶん殴ってやりたいが、身体の内部で指を増やされてばらばらに動かされたら、途切れ途切れの呼吸だけで精一杯で、だらしなく口を開けていた顔を太宰の手で横向かされ、額をこつんと合わせて瞳を覗き込まれた。
ああ、こいつ本当に、顔がいいなぁ……。
「……いつから、って聞いたのはさ」
顔が近づくのに任せて、自然と唇が触れ合う。離れてはまたくっついて、ぺろりと下唇を舐められたのに応じて舌と舌を絡ませると、小動物のように可愛いものだったキスが途端にくちゅくちゅと生々しい水音をたて始めた。
「……聞いたのは……？」
何だよ、と尋ね返してやったのに、太宰はにっこりと胡散臭い笑顔になってそれ以上は言わず、俺の身体をうつ伏せにし、尻たぶをぐいと割り開いた。
結局答えさせる気がないんじゃねぇか！　自己完結してるのか何か俺を試してるのかどっちだ、こいつの考えることを全部理解しようなんて気はさらさらないが、黙っていられると、ひょっとしたら知っておかねば後悔することなのではないかと少し不安になる。

だって、こいつはいつも肝心なことを俺に言わない。
全身包帯まみれの理由も、突然姿を消した理由も、自分の与り知らぬところで始まり、終わり、太宰ではなく無関係の他人の口から顛末を聞かされたりする。それがどれだけ不快なことか、俺とよく似た心を持っているおまえなら分かりそうなものなのに。
「おい、何か聞きてぇことがあんなら……ぁ、ん！」
指で敏感にされた粘膜が、ぬるりとした熱いもので押し広げられる。俺からはキスに応えただけで全然触ってやっていなかったのに、侵入してきたその先端がしっとりと先走りで湿っているのが分かって、じわあっと全身に汗が滲んだ。
全身に通っている神経の場所が全部分かるくらいに、ちょっと中をこすられただけで、感じまくってしまう。太宰の雄を受け入れることに慣れた後ろは、ぐずぐずにほぐれて奥まで迎え入れ、パンッと一突きされると、きつく締め付けて快感を拾った。
「はっ……あー、やば、すぐ出ちゃうかも……」
「あっだめ、だ…ゴムつけっ……あ、……ううっ……」
それ言うの遅くない？　と太宰は笑いながら、ぬぷ、ぬぷ、とわざと揺さぶるように腰を動かしながらゆっくりと俺の中から性器を引き抜いた。ゴムかぁ、どこにあったっけ？　と、その頭が忘れているわけもないのに、すっとぼけて聞いてくる。俺がベッド脇のナイトテーブルを指差すと、ああそうだったそうだったとひどい大根役者が一つ取り出して封を開けた。
ちゃんと付けているだろうな……何度か付けたふりして途中で捨てていた前科があるので、うつ伏せのまま顔だけ上げて、じっと一部始終を見守る。疑われてるなぁ、そんなに見られたい姿じゃないんだけど、と照れ笑いされたが、そんな可愛い顔したって騙されないぞ。

小さく膨らんだ精液溜まりを指でつぶして、ペニスに宛がい、するすると指で滑らせて装着している太宰の姿を見ていたら、こいつもコンドームを付ける時は普通の男と同じようにするんだなぁ、なんて、当たり前の感想を抱く。

「……なんか、私が面白くないこと考えてるでしょ」

他の男が付けるところなんて見たことないくせに、と言いながら、盗み見ていた俺の横顔をつかまえて、唇の隙間に舌を滑り込ませた。おかげで、なんで分かるんだ怖え、と突っ込むこともできやしない。訪ねてきた舌にちょんと触れたら、にゅるにゅると根本まで絡めとられた。

「んっ、んぅ、ん、……んん……っ」

激しく長いキスに、首の後ろがぞわぞわと痺れ、視界が濡れ始める。

もっとして欲しくなって、太宰の背中に腕を回し、夢中で舌を重ね合わせた。

「ん…キス、気持ちいいもんね…」

俺だけがいいみたいに言うんじゃねぇよ、と思いつつ、いつも唇が腫れるほどキスされて、舌がすっかりばかになってしまったのは否定できなかった。さっきみたいに口の中を指でかき回されるだけで、軽くイケるほど気持ちいい。それが直接舌で舐め回されているのだから、感じないわけがないのだ。仰向けになった俺と太宰の腹の間で、ろくに触ってもいない俺の性器が、いまにも射精しそうに膨らんでいる。

太宰が俺の脚を高く上げ、中断させたにもかかわらず全然萎える気配のない性器の先端を再び俺の後ろの穴にくっつけた。腰をしっかり掴まれて、ずぷぷ…と奥まで飲み込まされる感覚に、思わず、うあ、と声をあげて頭を振ってしまう。

「奥まで入るね……」

片脚を太宰の肩に抱えられたまま、固くなった乳首に音を立てて吸い付かれ、ふにゃりと力が抜けていく。ぱち、ぱち、と自分のまばたきの音がした。
「あ、おくっ…はぁ……っ」
太宰は弛緩した俺の身体に自分のペニスを埋め込んで、小刻みに震えている俺の足首に頬擦りしながら、恍惚と息を吐いた。うん、あたってるよ、と言って、揺さぶるように動かす。
「はっ、あ……っ、あ！」
いちばん奥を押されると、下半身が脳に勝って全身の感覚を支配する。じゅん…と快感が駆け巡って、それが断続的に何度も襲ってくる。気持ちいい。きもちいい。
「あっ…あ、あっ…、あ〜〜っ……」
何も考えていない、気持ちいいだけの声がひとりでに出て止まらない。こんなときに限って、太宰は変な声だとか俺をからかわなくて、ただ、そうだね、きもちいーね、と肯定される。そうされるとますます快楽の深みに落ちてゆき、自ら腰を振って欲しがってしまう。
「っ、あ、いく……っ、イ、ッ、あ、だざ、いっ…」
「はっ……あー、中也っ……」
ぐっぐっと腰を押し付けられて、ゴム越しでも熱いのが出されているのが分かった。ぎゅうとそれを自分の内壁が締め付けて、貪欲に搾り取っているのも。
今が朝なんて、嘘だろ。こんなエロいことされた後に、てきぱき身支度して仕事に行かなきゃならないなんて。この駄目人間と違って俺にはサボるなどという選択肢はないというのに、腰から下がまだ甘く疼いていて、気怠くてしかたない。
「休んじゃえば？」

余韻にひたっているのを見抜かれて、太宰がそんな誘惑を口にする。
「……休むわけねぇだろ。手前と違って暇じゃねぇんだ」
「いま、ちょっと迷ったくせに」
そんなエッチな顔したまま行かせたくないなぁ。太宰は口を縛ったコンドームを屑籠へ投げて、しっとり汗ばんだ俺の額の前髪を指でかき上げると、冗談というわけでもなさそうな声のトーンでそう言った。
「文句ならエッチな顔をさせた犯人に言ってくれよ」
「そう言われちゃねぇ。まぁ……今日の君の予定は、あの檸檬爆弾君のところに顔を出す以外は書類仕事だけだ。嫉妬深い私も、我慢するとしよう」
「なんで俺の予定が手前に筒抜けなんだよ！」
「考えたのだけど、君たちのあの集まりが、私を好き勝手に盗聴・盗撮してそのデータで楽しくやっているのだから、私だって中也を監視して良いはずだよね。君って、難しい任務が入ると、それに集中して何ヶ月も平気で音信普通になるし、恋人としては心配なのだよ」
四年行方不明になっていた奴に言われたくないのだった。「考えたのだけど」くらいのノリでマフィア幹部の行動予定を盗み見られては困る。そういえばシステム担当の奴らが予算を上げろと言ってきていたな。良い返事をしてやる代わりに、もっとセキュリティを強化させよう。
「手前自身は電網潜りでもねぇくせに……才能の無駄遣いなんだよなぁ、昔っから」
「何でもできてしまう恋人に惚れ直してくれても良いのだよ。…まぁ、才能の無駄遣いはなにも私に限ったことではないけれど」
「あ？　誰の話だよ。俺か？」

「いいや。君は君の才能を自分のために正しく使っているさ」
昔と違ってね、でもそれはそれで面白くないんだよねぇ、とぶつぶつぼやきながら、太宰はナイトテーブルの上に置かれていた飲みかけのミネラルウォーターを取り、ひとくち飲んでから俺に差し出した。シーツの上に座って長い脚を伸ばし、ショートホープに火を点ける。
シャッターチャンスだなと思ったが、以前、ファンクラブに提供する写真として太宰の寝顔を隠し撮りしていたのがバレて、「寝室での撮影は禁止」という約束をさせられてしまったので、仕方なくこうして、事後に気だるく煙草をふかす太宰の姿を目に焼き付けるしかない。
ねぇ中也、私たち恋人になろうか。そう太宰から言われて始まったこの関係も、もうじき半年になる。言われるままに受け入れたものの、最初は太宰と恋人として付き合うということがよく分からないでいた。
太宰が消えてからの四年間、何度も何度も同じ顔写真や数少ない映像を眺め、仲間たちと「顔が良い」「声が良い」「全部良い」「神が創りし存在」ときゃあきゃあ騒いでいた。太宰が再び横浜に現れたという情報が入ったときはもうお祭り状態で、全員なんとかして最新の太宰治を盗撮しようと駆け回った。そんな風に、遠巻きに騒いでいるのが楽しかったのだ。恋人になったらどんな風に振舞えば良いのか分からなかったし、一緒に推していたファンクラブのメンバーに対してうしろめたい気持ちもあった。独り占めにして良いものだと思えなかった。
結局、ファンクラブの仲間たちはみんな俺と太宰がこうなることを応援してくれたし、建前を剥ぎ取った俺の本心は強烈な独占欲の塊で、自分の知らない太宰治などあってはならないという執着が行き着いた先が、写真、映像、音声、目撃談に至るまでの「収集」であったのだと気づかされてからは、開き直って、恋人をしながらファンとしても推し続け、今に至る。

「……そんなに見てないで、社畜するならそろそろ着替えたら」
「拗ねるなよ。手前も真面目に仕事すりゃいい話だ」
「君が出て行ったら、ぼちぼち行くよ」
「……なぁ、太宰」
楽しいか？　と問いかけた自分の声が、まるで十代の頃の太宰にかけたときのようで、自分でそのことにびっくりした。なんとなく思い出してしまったからかもしれない。いつも任務終わりには好きでもない煙草をつまらなそうにふかしていたそいつのことを。
「……言っておくけど、仕事がつまらないとかつらいとかいう理由で煙草をよく吸うようになったと思っているなら、昔も今も勘違いだよ」
「じゃあなんでまた吸い始めたんだよ。貰い煙草だけだった奴が」
「ないしょ」
太宰は煙草を持っていない左手の人差し指を唇に添え、俺を見て微笑んだ。あ～～～「写真」
「ダメ」駄目だった。いま顔が良かったという自覚があるくせに意地悪だ。
そんな寂しそうにも見える態度をされたら気になってしまうが、もうそろそろマンションの前に迎えの車が到着する時間だ。シャワーを浴びて身支度して出てちょうどというところだろう。この部屋から自分の職場であるポートマフィアのビルまでは歩いて行ける距離だし、自分の愛車であるバイクを走らせればそれこそ一瞬で着くのだが、幹部ともなると、運転手を使わなければ部下たちへの示しがつかないと言われるので、仕方なく来てもらっているのだった。
他人の車で送ってもらうなんて、逆に幼稚園児みたいじゃないかと自分は思ってしまうのだが、運転手を付けるよう周囲から言われ始めた当時に姐さんの前でそんなことをぼやいたら、「おや、

それなら私も首領（わっちボス）も明日から幼稚舎に通わねばならぬの」と言ってころころと笑い、「車も服と同じ。様にならぬと感じるのは、おぬしがそれに見合うだけの人間に育っていないからじゃ」とばっさり言われてしまった。それで観念して、元々太宰の運転手をしていた荻原（おぎわら）という男を俺の専属運転手に起用したのだが、今でも内心では、バイクで通勤したいと思っている。

「行くの？　荻原さんによろしくね」

ベッドから降りて、浴室へ向かおうとした背中に声をかけられた。

「あ、そうだ手前、この間、荻原に手前のアパートまで送らせただろ！　組織を裏切った奴が堂々とうちの車を使ってんじゃねぇよ」

「いやぁ、顔を見たら懐かしくなっちゃってね。心配しなくても、車に乗ろうとしたら頭に銃を突き付けられたよ。『今は中原様の車ですから』だって。なんか元カノを寝取られた気分〜」

偉い。さすが俺の運転手。後でボーナスを出しておこう。

「中原様の『オンナ』を送るのも運転手の仕事じゃない？　ってお願いしたら、それは失礼しました、って後部座席のドア開けてくれて、安全運転で送ってくれたよ♡」

やっぱりボーナスは無し。何を簡単に言いくるめられてんだ。というか、こんな包帯だらけの大男が俺のオンナであってたまるか。

「ごめんね、もうしないよ。私に優しい荻原さんが減給されたら、心が痛むからね」

それは嘘ではないように聞こえた。そうしてくれと溜息を吐いて、俺は浴室へ行き、シャワーを頭から浴びながら、今日一日の退屈な予定を思い出していた。

◇　◇　◇

おう邪魔するぜ、と鋼板のハンガードアを足でぶち破って中へ入ると、「んなあああ!?」と梶井が素っ頓狂な声をあげて両腕を上下にばたばたさせながら俺を出迎えた。
「幹部殿はどぉーして毎回この梶井の研究室の扉を破壊してお出ましになるのか!?　理解不能！　ご連絡いただければ内側から開錠すると言っているのに！」
「嘘つけ。手前はここに一度入ったら、普通に呼びかけたって絶対気づかねぇんだよ。俺は待たされるのが嫌いだ。さっさと本題に入らせてもらうぜ」
鶴見区の南側、川の下流と運河に囲まれた埋立地に密集している倉庫に紛れて、梶井の個人的な研究を行うための研究室がある。丸善ビル爆破事件の容疑者として指名手配されていたこの男をポートマフィアがスカウトするにあたり、出された条件が、好きなだけ研究に没頭できる場所と資金の提供だった。スカウトを行った当時の幹部がこの場所を工面したと聞いているが、その幹部は抗争で帰らぬ人となり、今は俺の指揮下となっている。
首領の采配を疑う気は一切無いが、この梶井といい芥川といい、扱いの難しい変わり者は大体上司不在になった後、俺のところに回される傾向にある。部下たちは「あの太宰さんの相棒だった中原さんになら、首領も安心して任せられるんですよ」などとフォローしてくれるが、あまりそういう包容力を期待されても困ってしまう。
「うはッ、うははは！　本題、それは即ち組織内の予算の見直し！　聞いております、心得ております！　我々ポートマフィアの利益となる活動が認められた部門は、次年度の予算アップ！」

「そうだ。その逆の場合は、予算を下げるし、無用な活動だと判断したら設備や資金面での援助も打ち切る。つまり、この研究室は引き払ってもらう」
それでは約束が違うと喚き出すことも想定して言ったのだが、梶井は驚きもたじろぎもせず、まるで自分には関係ないといった態度で、両手を広げ、その場でくるくると回ってみせた。
「この素晴らしい科学の神域が無用であるなどありえない！　今日は幹部殿に僕の偉大な研究の成果をとくとご覧いただきましょう！　そのために待っていたんですよ！」
「ほう。何か作ったのか？　言っとくが、手前の『檸檬』の改良版とかならナシだぜ」
梶井が一個一個手作りしている檸檬型爆弾は、爆薬成分が一切検知されない代物で、改良などせずとも、今の状態で価値としては十分なのだ。首領からは時期を見てその製造方法のレシピを聞き出し、大量生産できる体制を構築するようにと以前から言われている。
「改良版？　檸檬爆弾は究極の完成形。改良など不要です」
梶井は色付きゴーグルの向こうでくわっと目を見開き、ぼろぼろに破れている白衣の袖から紡錘形の檸檬爆弾をひとつ取り出し、俺の眼前に掲げて見せた。檸檬型爆弾で毀傷を受けないという奇天烈な異能力を持つ梶井は、爆破の渦中で人の死を観察することを興味の対象にしている。その趣味のせいでいつも着ている物はぼろぼろなのだが、青丹色の長いマフラーだけは大事に手入れしていて解れも無い。それが彼をマフィアに勧誘した人物からの贈り物であることに中也は気づいていて、そんなことに気づいてしまう性格だから、いつでもいいと言われたのを言い訳に、彼を切り捨てるタイミングがやってきたときのために檸檬爆弾の製造法を聞き出すことも自分はできないでいるのだ。部下を従えるのに向いてないとまで自分を卑下するつもりもないが、向いているわけでは決してないと思っている。

梶井は下駄で器用にてんてんとステップし、床に散らばった機材を避けながら、研究室の奥の六畳分ほどのスペースを占拠している巨大な装置の前に立った。

天井がドーム型になっている金属製の匣(はこ)だった。正面にドアが付いていて、業務用の冷凍倉庫に使うようなごついハンドルを梶井が掴んでぎぃぎぃと難儀そうに開く。その内部は空洞になっており、梶井は内部へ入り、先ほど取り出した檸檬爆弾を無造作に中央に置くと、再び外へ出て扉を閉めた。

「さぁさぁ幹部殿！　この梶井の世紀の大発明！　どんな物質でも操作者の思いのままに増やすことのできる志向追跡型物質自動増殖装置、『ビスケット3号』！　かの福音書においてイエスは五つのパンと二匹の魚を増やし五千もの民衆へ与えたという！　うはははははは！　まさに神の御業を科学がここに再現するのである！」

とくとご照覧あれ～！と大騒ぎしながら、ごてごてと配線が繋がったヘルメットを頭に被り、装置の側面に取り付けられているコンソールを操作し始めた。

ごぅんごぅん……と年代物の洗濯機のような音が数分響き、チーン！と世紀の大発明にしてはレトロな音とともに装置が止まった。何も起こらねぇじゃねぇか、と俺が言ったのとほぼ同時に扉が勢いよく開き、中からパチンコの大当たりのようにごろんごろんと大量の檸檬が、いや檸檬型の爆弾が転がり出てきた。

「どぉーです!?　檸檬爆弾がこんっなに！　うはッ、うはははは！」

「いや、いつものやつ量産しただけじゃねぇか！」

「いかにも。量産！　それが幹部のお望みでは？　この檸檬爆弾は僕の手内職で作ってる。レシピだけ渡しても僕と同じようには作れな～い。なれば装置！　オ～トメ～ショ～ン！」

「うっ……まぁ…自動で量産できるのは、組織にとっては助かるが…」
梶井の檸檬爆弾は、その出来の良さから裏社会では高値で取引されている。交渉材料にも使える品だ。それゆえ首領から量産を望まれていることを、梶井はとっくに察していたのだった。
「こうして志向情報送信デバイスを頭に装着して、具体的に増やしたい物質の中身を定義してあげる必要があるのですがね」
「そうなのか。すげえ発明だが、結局手前がいなきゃ増やせねぇってことだよな？」
ごろごろ転がってくる檸檬を靴先で隅に寄せながら、それでは、梶井が不在となっても爆弾は残るという首領のニーズは満たせないな、と考えていたら、俺より二十センチも背の高い梶井の両手が俺の頭の上で件のデバイスとやらを持ち上げていた。
「試しに幹部殿も増やしてみますかぁー？」
「なん……うおっ！　馬鹿か、帽子の上から被せようとすんじゃねぇ！」
愛用の帽子を妙な機械で潰されそうになったので、咄嗟に帽子を脱いだら、その妙な機械を頭にすっぽり被らされてしまった。まあせっかくだし付き合ってやるかと、これはどうやって使えばいいんだ？と梶井に尋ねた、ちょうどその時であった。太宰が入ってきたのは。
「ああいたいた、中也～、君、部屋にスマホを忘れていってたよ……何そのヘルメット？」
「だ、太宰ぃ!?　てめ、なんでここに」
「え？　だから君のスマホを」
「――元最年少幹部の、太宰治？」
「ん？　やぁ、爆弾魔君か。私とは初めましてだね。ところで中也に何しようとしてるの？」
「……ッは、これは僥倖！　大科学実験の被験者一名をただいまご案内～！」

「えっ」
一瞬のことだった。梶井の大きな手に突き飛ばされて面食らった顔をした太宰が、量産型檸檬が放出され尽くしてすっかり空っぽになった装置の中へ飛び込んでいき、内部の壁面に背をしたたか打った衝撃で扉がガチャリと閉まった。
俺が頭に被っていたデバイスがピーーーと音を鳴らし、ごぅんごぅん…と装置全体がまた振動を始めた。「な、なに!? 中也! ちょっとこれなんとかしてー!」中から太宰の情けない悲鳴が聞こえてくる。
「おい、梶井、止めろ! 太宰が増えちまう!」
(太宰が……増える……?)
なにそれちょっと良い…と思ってしまった。が、太宰はモノではないしそんな場合ではない。
「早く装置を止めろ! 人間が入ったらどうなるんだ!? 大丈夫なのか!?」
「途中で止めると増殖途中の状態で出てきてしまうかもしれませんなぁー?」
増殖途中の状態。想像するとぞっとして、強引に扉をこじ開けようとハンドルへ伸ばした手を引っ込めた。
「さぁーて、自我を持った人間というサンプルを増殖させるとどうなるのか? 遺伝的に同一である細胞の集合に過ぎない木偶が生まれるか、はたまた中原幹部の志向を再現した完全な別個体が生まれるのか? どうせ彼はポートマフィアの裏切り者、実験が失敗したとしても、我々で処刑したことにすれば良いのです」
「ふざけんな、処刑するにしても独断の私刑が許されるレベルの奴じゃねぇんだ。それに今はうちと休戦協定中の武装探偵社の社員だぞ。いいからさっさと装置を止め――」

相変わらず激しく左右に揺れている装置の周囲からもくもくと白煙が立ち始めた。おいおいおい、なんかやばいんじゃねぇのか？　音の鳴り止まないヘルメットを被ったまま梶井を睨み付けるが、首をかしげてその様子を見ているだけでその場から動こうとしない。
「何してんだ！　早くし」
梶井の腕を乱暴に掴んでコンソールの前まで引きずって行こうとした時だった。ぱちっと扉の前で火花が散り、次の瞬間、爆発音とともに一斉に噴出した白煙が辺りを飲み込んだ。俺は反射的に梶井を抱えて重力操作で外へ飛び出し、すぐに一人で研究室の中へ舞い戻った。
「…ざい！　…太宰！　無事か！」
煙が濃すぎて前が見えない。声を張り上げたら、それが器官に入り込み咳が出た。散乱している機材が足に当たり、二度何かが肩にぶつかった。
ようやく装置まで辿り着いた時、中からよろよろと動く人影が現れ、俺の肩に身体を預けるようにして倒れ込んだ。くせのある黒髪が耳を掠める。太宰だった。
「……っ、おい、しっかりしろ！」
急いで外へ連れ出し、混凝土の地面の上に太宰の身体を横たえる。梶井が「消火！　消火ー！」と騒ぎながら俺たちと入れ違いで研究室へ駆け戻って行った。一瞬、止めるべきかと思ったが、派手な煙の割には、中で炎に囲まれるようなことはなかった。まぁ、大丈夫だろう。
「うーーん……」
煤の付いた顔に貼り付いた前髪を潮風が撫でる。いまや見なれた砂色のコートの袖から伸びている腕が、スラックスから伸びている足が、必要十分な数くっついていることを確かめてほっと胸をなでおろした。

「大丈夫そうだな」
「ごほっ…全然大丈夫じゃないのだけど……なんでこんな目に遭わなきゃならないわけ…？」
「手前が勝手に来て巻き込まれたんだろうが、自業自得だ」
「恋人の忘れ物を職場まで届けに来てあげた優しい私にその言い草～？」
「頼んでねぇし居場所も教えてねぇんだよ。クソッ…人が集まって来やがった」
先刻の爆発と建物から洩れる煙を見て、近隣の倉庫街から野次馬が集まって来る。どうしたものかと一瞬考えていた時、人混みを縫って一台の車が現れ、俺たちの前に停まった。
「――荻原さんのお迎えだ。ということは、私たちはここを離れた方が良いということだね」
「……手前に言われなくても分かってる」
俺の専属運転手であり、その前は太宰の専属運転手であったポートマフィア構成員、荻原浩（おぎわらひろし）の持つ異能力『あの日にドライブ』は、自分が運転する車に載せたことのある人物の危機を察知することができる。つまり、俺から指示されたわけでもなく荻原が車を出すのは、雇い主の危機であるということを意味する。
「おい、梶井！　予算の件は、手前がこの場を収拾したら考えてやる！　手前で始末をつけろ！」
「うはははは…ゴホッゲッゲッ！　オマカセクダサァーーイ！　ゴホゴホゴホ！」
外から呼びかけたら、煙で姿は見えないが一応返答があった。ここは梶井の仕事場だ、自分で何とかしてもらうとしよう。俺は太宰の首根っこを掴んで後部座席に放り込み、自分は助手席に乗り込んで、武装探偵社の前まで行けと命じた。
「与謝野先生に診てもらわなくても、私、本当に大した怪我はしてないよ？」
「そんな心配はしてねぇ。サラリーマンだろ仕事しろ」

もうそんな呼び方は死語だよ中也、と言いながら、助手席のヘッドレストの後ろから手を回してちょっかいをかけてくる太宰を適当にあしらう。俺たちが付き合っていることは、一応おさむくんファンクラブのメンバー以外には秘密にしているのだから、部下の前で堂々とひっつかないでほしい。まぁ、毎朝俺の自宅に迎えに来る荻原にはとっくにバレているのだろうが。

「じゃあな。どこも痛くねぇなら、しっかり働けよ社会不適合者」

車から降りた太宰が、しゃんとその場に立っているのに心中で安堵しつつ、もしどこか異常があったとしても、与謝野医師のいるこのオフィスにいれば大丈夫だろうと考えた。

「マフィアの台詞じゃあないね。まぁでも、送ってくれてありがとう」

心配なんてしていないと言ったのに、俺の考えていることは知られてしまっているようだった。太宰は珍しく素直に礼を言い、窓ガラス越しに手を振っていた。

◇　◇　◇

午前の予定に時間を取られすぎた。山下町のホテルニューグランドの前で一度車を停めさせ、カフェでクラブハウスサンドをテイクアウトした。この後は最近の出張任務で溜まってしまった書類仕事にひたすら向き合うだけだ。行儀は悪いが、自分の執務室で食べながら片付けるとしよう。どうせ誰に見られるわけでもない。

姐さんの直揮部隊に所属していた頃はこうはいかなかったな、と、自分の執務室へ向かう専用のエレベーターが来るのを待ちながら、懐かしい日々に思いを馳せる。

食事を片手間に取るような余裕の無い男は仕事も雑なものよと、下級構成員の待機所でファス

トフードのハンバーガーをかじりながら作戦指令書を読んでいたときによく言われたものだった。食事なんて、腹が膨れて安けりゃいいと思っていた俺は、見様見真似で意義も理解しないまま、食事のために時間を取り、作法を覚え、自分でも作ってみるようになった。

今でも「腹が膨れりゃそれでいい」という価値観は俺の中に残ったままだが、自分で食材を買い、調理し、見栄え良く盛りつけて、秘蔵のワインと一緒に楽しむ時間は、いいものだと感じる。言ってしまえばその程度の理解だけれど、テーラードスタイルの服や靴、ヴィンテージのワイン、それを引き立てる食事、どれもバイクとロックを愛する自分の趣味ではなかったが、触れてみてなるほどいいものだと感じ、そんな体験を繰り返すうちに、首領と姐さんの側にいても浮かない空気感を纏えるようになった。言うなれば全てが、「幹部」の俺の装いであるのだ。

たまには雑なことしてみるのも愉しいもんだ。クラブハウスサンドの入った紙袋が俺の手の中でかさりと音を立てるのににんまりしながら、廊下に控えていた部下に手を振って休憩に行かせ、執務室の扉を開いた。

「遅かったね、中也」

ばさっ。楽しみにしていた昼食が、真紅色の絨毯の上に落ちた。

何してるの、勿体ない。執務机の上に腰掛けていたそいつは、いらないならもらおうかな、と言って俺の足元から紙袋を拾い、パンからはみ出したトマトを黒い革手袋でひょいとつまんで、大きく開けた口の中へ放り込んだ。

「て、め…なに、どうやって、ここに」

「私の部屋に、私が入れない理由なんてある？　…ふふ」

なんてね、冗談だよ。そいつは薄ら笑いを浮かべながら、応接用の一人掛けソファに座り、袋の中に手を突っ込んで、ばらばらになったサンドイッチを口元へ運ぶ。
革手袋と黒いシャツの隙間からのぞくのは、トレードマークの白い包帯。前髪でほとんど隠れた右目と左頬も包帯と絆創膏で覆われている。普段会っていて見たことのないグレーのスーツのジャケットは客用のソファに脱ぎ捨てられていて、着崩した襟元に緩く結ばれたクロムイエローのネクタイと、ワインレッドのストールが、得も言われぬ色気を匂わせていた。
「どういうつもりだ……手前、いくら休戦中だからってこれは庇いきれねぇぞ」
そのストールの色から連想される存在は、森鴎外…ポートマフィア首領だ。かつて森から直々に勧誘されて組織へ入り、彼の外套を贈られた太宰が、思い当たらないはずがない。首領からの外套は焼いて捨てたと言っていたこいつが、なぜ。
「くっ…くっ、くく……」
声を凄ませて睨んだ俺を無視して、太宰はしばらく無表情に袋の中身を食い散らかすと、急に興味をなくしたように袋を床に放って、座ったまま俯いて肩を震わせた。可笑しくてたまらないというふうに。
「……庇う、だって？　君が私を？　冗談だろ」
そんな発言が許される関係じゃないことは、君が一番よく知っているはずだけど。
俺が着ていたジャケットのポケットからスマホを取り出してどこかへ電話をかけるのを、太宰は止めもせずじっと見ていた。
頼む。頼む出ないでくれ。せっかく職場まで送ってやったのに、結局サボッてこんな悪ふざけして、しょうがねぇ奴だな、殴って追い出すだけにしてやるから。だから、早く種明かしを、

「――中也？　どうしたの？」
「……！　だ、だざい、太宰…か？」
「――他に誰がいるのさ。なぁに、また何か忘れ物した？」
「いや…なんでもねぇ。悪いな、仕事の邪魔した」
「――別にいいけど。それじゃ、また今夜ね」
ああ、と震える声で答えて電話を切った。しまった、身体に異常はないかと尋ねればよかった。だが、太宰の声は何か隠すふうでもやせ我慢するふうでもなくて、落ち着いた話し方だった。
さっき武装探偵社の前で別れた太宰は、あそこで普段通りに過ごしている。
ならば――今俺の目の前にいる、この太宰はいったい誰なんだ。
「確認作業は終わった？　残念だけど、君の推測は当たっている」
「嘘だ。誤作動であの装置は壊れた。中にはアイツ――太宰一人しかいなかった」
誰がちびっこだ。しかし、言われてみれば太宰を救出しようと研究室へ舞い戻ったとき、立ち込める白煙の中で何かにぶつかった気がする。
「煙の中で、ちびっこが腕にぶつかってきた気がしたけど、あれ君だったんでしょ？」
「外へ出たときに梶井君がいたから、信じられないなら彼にもかけてみたら？」
言われて、すぐに梶井の番号に電話をかけたが、今度は一向につながらない。あの騒動を一人で何とかしろと言って残して来たから、それにかかり切りなのだろうか。
梶井が作ったあの装置――志向追跡型物質自動増殖装置、と言っていた。「こうして志向情報送信デバイスを頭に装着して、具体的に増やしたい物質の中身を定義してあげる必要があるのですがね……」そう言って、俺の頭にそのデバイスとやらを被せ、そこに太宰が現れた……。

「子供というのは哀れなものだね。どんなに軽率なきっかけで生み出されたとしても、生みの親へ向かう執着を手放せない。それどころか、できることなら親を喜ばせる自分になろうと、褒められることをしようと努力してしまう」

俺が、生み出した？

あの頭に被らされたデバイスが、俺の志向を読み取り、装置に入ってしまった太宰に作用した。

この姿、この場所にいる太宰を、俺が望んでいたと――？

「……私の部屋、って言ったな。あれは、どういう意味だ」

「そのままの意味だよ。ここは私の部屋…だった。私が組織を抜けた後、君が使い始めた。最初は何か手がかりを残していないか探すつもりだったのだろうけど…ふふ、他にも部屋はあるだろうに、可愛いことをするね」

自分の使っていた勝手知ったる部屋だから、侵入するのは容易かったよ、と言った。

「もう二度と戻って来るな、せいせいするなんて言いながら、この部屋をずっと綺麗に使って、そして、頭の中では私にこんな悪趣味なアクセサリーをつけたりする」

太宰が両肩に掛けていたワインレッドのストールをするりとほどき、床に落とした。

「隠し事は無駄だよ。私は君の願望が生み出した太宰治なのだから。ああ…心配しなくても、君が持て余す前に、この身体は崩壊する。所詮、事故で偶然増殖したモンスターだからね」

ねぇ Papa、と子供が甘えるような声で俺を呼びながら、太宰は黒い革手袋を嵌めたままの右手を俺に差し出した。

「食べたら汚れちゃったよ。中也が舐めて綺麗にして」

君が首領になった私にされたいこと、全部叶えてあげる。そう言って、太宰は笑った。

太宰の太腿の間で膝立ちになり、差し出された手を手袋越しに食んだ。指の一本一本を咥えて、革を傷つけないように唇の裏側でしゃぶりながら、時々喉に貼り付く食パンのかすの味に、牧歌的な気持ちになりかけては、無表情に自分を見下ろす視線を感じて腰から下がじんと痺れる。

こんなことをしていていいのだろうか。この太宰の言葉を信じるならば、この太宰はあと数時間もしないうちに消えてしまう…身体が崩壊するというのが文字通りのグロテスクな状況だとしたら、死んでしまうということだと思うのに、悠長にこんな遊戯に応じたりして。

「まるで野良犬だね。残飯を舐めただけで、ここをこんなに興奮させて」

「あ、……ぁ、んう……っ」

太宰は足を上げ、キャメル色の革靴で俺の下肢をぐりぐりと嬲った。ズボンを押し上げていた自身の膨らみを踏みつけられ、まるで頭の中の偽善的な迷いを見抜かれ軽蔑されているようだと感じた。ああ、そうだ。この場所で、この部屋で、こんな姿をした太宰治に虐められていることを思うと、頭が茹で上がりそうなくらいに自分は興奮している。ファンクラブのメンバーに見せたら死人が出るのではないか。これが俺の願望の太宰だと言うなら、俺が抗えるわけがない。

「中也、これは夢だよ。仕事で疲れた君が執務室でうたた寝している間に見た、はしたない夢だ。だから、欲しいものを言いなよ。……どうしてほしい？」

「あ……」

手袋の感触が口の中から出て行く。すぐそばに、太宰のスーツに隠された性器があり、それは何の反応も示していなかった。艶の無いベルトのバックルが鈍く光っている。いいよ、と何も言わないうちから優しく許されて、耳朶を撫でられた。その手がひんやりしているのは、俺の身体に熱が集まっていることを証明していた。

跪いた体勢のままで太宰の前を寛げて、下着の隙間に指を引っ掛け、柔らかい性器を取り出す。いつもなら一戦交えた後だってもう少し固いのに、この太宰は、俺では全く興奮できないのだな、と思ったら、その瞬間、ぞくぞくと背筋を感激にも似た劣情が走った。

太宰がもし、ポートマフィアに残っていたら。

首領はきっと、遅かれ早かれその椅子を太宰に明け渡しただろう。それはただの予感だったが、自分の中に確信があった。そして、自らが首領となることを受け入れたとしたら、太宰はきっと俺を最も俺の嫌がる形で拘束する。そう、例えば幹部ですらなく、番犬のように俺を使う。

どこかでそれを、望んでいたのだろうか。太宰がいなくなって、腹の立つことは激減したが、仕事の最中に思わず笑い出してしまうような、楽しくて仕方がないというような、そんな瞬間もなくなった。自分が部隊を指揮するときでさえ、さほど心は踊らない。仕事とは元来そういうものなのだと割り切ったし、面白くないからなんて青臭い理由で辞める気もさらさらないが、時々どうしようもなく、恋しくなるのだ。——ああ、あいつの作戦で暴れたい、と。

耳朶に触れていた指が、俺の赫い髪を梳いて耳に掛ける。片方しか見られない太宰の目は、夜の底のように昏い色をしていた。俺は太宰のペニスを自分の頬にぺたりと付けて、じっとその目を見上げる。これから訪れる快感を想って、瞳がじわじわと濡れていった。

そのまま、ちゅ、と亀頭に口付けて、ゆっくりと口の中に招き入れる。このくらいのサイズだと食べやすくていいな、と間の抜けた感想を抱きながら、じゅっと水音を立てて喉の奥まで咥え込む。太宰は表情を変えない。どきどきして胸が痛かった。

唾液を纏った薄い舌で幹を上下させて、じょじょに張り詰めていくペニスに嘔吐きそうになりながら、唇の端から唾液を一筋垂らし、夢中でしゃぶり付く。

フェラは好きだ。自分以外の男のペニスに口で奉仕するのも、触れることさえ、太宰が初めてだったけれど、「中也は舌が敏感だから」と知りたくもなかったことを教えられてからというもの、太宰の身体を舐めているだけで気持ちよくなってしまう。それはぬるぬるした場所であればあるほどヨくて、たとえば舌、唇の裏側、そして性器を愛撫するとき、同時に自分のことも追いつめてしまうのであった。やらしくてかわいい。太宰はよく最中にそんな感想を並べて俺のことを恥ずかしがらせた。

「上達しないねぇ…そんなに感じながらじゃ、仕方ないのかな」

そこに四つん這いになって、と言って、太宰は床の絨毯の上を指差した。

まだ少し大きくなったくらいのペニスを名残惜しく口から離して、俺は絨毯の上にうつ伏せになり、腰を高く上げた。幹部になったとき、自分で選んでオーダーした絨毯だ。まさかこんなに顔を擦り寄せて使う機会が来るとは思わなかった。

「脱いで」

言われるまま、クロスタイを外してその辺に放り、白いシャツの釦を全て外して上半身を晒す。ごそごそと腰のベルトを探って引き抜き、背後で見ているであろう太宰の前で、膝裏までズボンを下ろした。太宰の手がどこにも触れてこないので、次に履いていたボクサーパンツにも手を掛け、下ろす。

ひたりと革越しの手のひらの感触を受けた。丸出しに突き出した尻を揉まれ、親指でアナルを押し開かれる。潤滑剤も使わずに指で擦られたそこが、ひりひりと痛んだ。朝に一度したとはいえ、もうとっくに乾いていて、とても太宰の逸物を受け入れられそうにない。太宰の手が離れたので、こいつもそう分かったのだろうと思ったが、それは俺の勘違いだった。

「…あ、……ぁっ、……あぁぁッ！　……うぅっ……」
ぐち、ぐちっ、と太宰は自身のペニスを二、三度扱き、再び俺の尻たぶを開いて、膨らんだ亀頭をアナルにぐっと押し込んだ。俺のフェラでべとべとになった太宰の性器は、入口で押し返されながらも強引に侵入してくる。さっき指で擦られたところが拡げられて痛い。痛みを逃がそうとゆっくり息を吐いたとき、入口がわずかに緩んで、雁首までずぷんと埋められた。
「ひぃっ、ゃっ、……あっ！」
遠慮のない動きで太宰は真っ直ぐに俺の体内を貫く。自分がイくためだけの動きだ。絨毯の上で手を藻掻かせて腰を逃がそうとするが、手で尻を強く張られて、へなへなと崩れ落ちてしまう。ふわふわと立った短い起毛が鼻や口に入って、くすぐったかった。
こんな、セックス。されたことがない。
使われている。そう思うと、背骨に沿って蛇が這い回り、悦で満たされていく。
「…ィッ、いたいっ、太宰……！　む、り、無理だからぁっ……！」
「そう。良かったねぇ」
声は太宰のまんまだ。本人から増えたのだから当然といえば当然なのだろうが、ひどく倒錯的な気持ちになり始めていた。
無理やり犯されているような格好で、しかしその実、この太宰も、この状況も、俺が心の奥底で望んでいたものなのだ。自ら企画したＡＶに出演しているような滑稽な有様である。
太宰の写真や動画を集め、仲間内で盛り上がり、自宅に帰れば泊まりに来た太宰に「かわいい、かわいい」と甘く煮詰めて融かされるようなセックスをされる。告白も再会後、太宰からだった。朝から晩まで太宰治に満たされた日々を送りながら、まだ欲しがる余地がある。

「っ、ひ……ぃあ、やっ、きもち…いいっ……イっ！」
床を自分の涎で汚しながら、痛みの中から快感だけを拾い始めていた。さっき太宰に踏まれた自身の性器から、先走りが溢れてきたのが分かる。熱を持ってひくひくと収縮しているアナルを激しく責められ、うまく息が吸えず何度も咳き込んだ。
「……ねぇ、中也」
私にここにいてほしい？　と、太宰は尋ねた。
すこし怖い御伽噺のようだと俺は思った。正確にはたぶん人間ではない男からのこの問いに俺が間違った答えを返せば、本物の太宰は、いなくなってしまうような気がした。
俺は、太宰がいい、と答えた。
「案外、卑怯なとこあるよね、君は」
その太宰はそれ以上聞かずに、抽挿を再開した。太腿の裏にぎゅうっと力が入って、腰が勝手に動く。ちょうど太宰のソレが入っているあたりの腹を、革手袋の冷たい温度で擦られたら、もうだめだった。あ、あーっ、と声が出て全身がこわばり、見慣れた執務室が明滅する。
「……ッはあ…！　あ、あっ、だざい、いって……っ」
「はっ……」
とぷ、と腹の中に精液を注ぎ込まれる。こんな挿入れて射精しただけのセックスなのに、勝手に涙が溢れてくるほど、身体中の痺れがおさまらなかった。頭の中が真っ白になる。
床に倒れたまま、太宰がベルトを掛け直す音を聞く。俺が起きれないふりをしていることには気づいていただろう。けれども、何も言わず、本棚のあたりの壁を隠し扉でもあるのかごんごんと叩き、静かになったときには、忽然と姿を消していた。

◇　◇　◇

午後はまるで仕事にならなかった。執務室には性の痕跡が残っていて、太宰からした、嗅いだことのないコロンの匂いだとか、黒い革手袋で触れられた感触だとか、そういえばキスも愛撫もされなかった、ただ靴の先で踏まれ、精液を吐き出されただけで――そんなことを考えていたら、書類にサインする場所を何度も間違えた。

書き損じのローマ字のサインを魚の絵にして誤魔化そうとし出したあたりで、今日はもう帰った方がよさそうだ、と思った。頭の中がいかれたままなのだ。

情報を全て頭の中に記憶して外部に持ち出さない太宰のやり方を見ていた自分は、自宅に仕事を持ち帰るのがどうにも太宰に対する敗北宣言のような気がして、できない。今日はいったん頭を冷やして、明日一日使って片付けることにしようと決めた。そうだ、太宰のやつが今夜も来るようなことを言っていたし、何か美味いものでも作って、スカッとする映画を観よう。

荻原には近所のよく寄るスーパーまで送らせ、二人分の食材の入った袋を片手にマンションへ帰った。ロビーに座っているコンシェルジュの女が職務的な微笑みを浮かべて頭を下げる。

エレベーターで二十七階まで昇り、部屋の前まで来てドアノブに触れようとしたとき、室内に人が動く気配を感じた。前にもこういうことがあったっけなぁと思いながら、俺は、もしかしたらこうなるのではないかと、むしろそれを確かめるつもりで早く帰りたかったのかもしれないと自問自答した。

「おかえり、中也」

今日はずいぶん早いんだね、と言って、嬉しそうに微笑みながら太宰が玄関まで出迎えに来る。濃紺のタートルネックセーターを着ていながら、それでも寒いのか顔色が悪かった。腕を支えるカフの付いた松葉杖を突きながらよたよたと廊下を進んで来る太宰を見て、俺は、自分の犯した罪を静かに受け止めていた。

「……馬鹿だな。どうせ生まれたなら、好きなことをすりゃいいのに」

あっ、と弱々しい声をあげて転びそうになった太宰の上半身を受け止める。むかつく身長の高さは変わらないが、その身体は冷たくて軽かった。背と膝裏を手で支えて持ち上げ、寝室のベッドの上に運ぶ。ちょうどコーヒーを淹れたところだよ、と俺の顔を見つめて言った。

「ああ、もらうよ。ちょっと簡単に何か、食べられるものを作ってくる。少し寝てろ」

「うん……」

少し伸びている黒髪をかき上げて耳に掛けてやると、額から右の顎関節までが、黒い煙のような痣で覆われていた。よく見ると、目の色も片方少し薄い。首には引っ掻いたようなケロイド状の傷跡がいくつもあり、右足は動かないのだろう。

キスをすると、まるで男を知らぬ少女のようにはにかんで、それに応じた。きゅっと閉じられていた唇を舌の先でつっつくと、おずおずと口を開けた。先が丸くなって引っ込んでいた太宰の舌をつかまえて絡め取り、音を立てて吸い付くと、呼吸が少しずつ期待に弾み始める。

「ん……ん、っ、〜〜……ッ」

「っふ…それじゃ、おとなしく待ってろよ」

名残惜しく口付けを解いて、太宰を寝室に残し、廊下へ出る。玄関に置いたままだった買い物袋を取りに戻り、キッチンのシンクの上にそれを置いて、シンクに両手を置いて突っ伏した。

（こ、こ、こ、興奮する〜〜〜〜〜〜!!!!!!!!）

なんだあの太宰。いや、どう考えても自分があの装置で作り出した俺の願望太宰なんだろうが、理性で蓋をしていた隠された性癖を現物で見せつけられると、興奮して発狂しそうであった。

太宰は、ウイルス系の異能力者だ。発動中の異能力または異能力者に触れることで、その異能力の性質をウイルスに変換し、自らの体内に取り込む。太宰の体内に取り込まれた異能力は発動不可能となり、時間経過とともに能力は戻るが、その異能力者が死亡してしまった場合は、ウイルスが異能力者の元へ戻ることができず、太宰の中に留まり肉体を蝕み続ける。

二人とも組織にいた頃は、決して太宰は俺にその事実を明かしてはくれなかった。なぜなら、俺もまた、太宰を蝕む異能力というウイルスの保有者であり、太宰が俺に触れて汚濁を止めることが作戦に必要不可欠であった場合、俺からの余計な気遣いで煩わされたくなかったのだろう。

四年経っての再会後、太宰の秘密を知って、俺はこう思った。もう、『人間失格』を使わないで欲しい。使うことがあったなら、無効化した異能力者には、死なずに生き延びて太宰の身体にこれ以上傷を残さないで欲しい、と。

それがどうだ。俺の本音はこんなもんだ。異能力者を殺さない武装探偵社にいてほしいと思いながら、ポートマフィアの首領になって俺を使ってほしいと望み、傷を負わないでほしいと願いながら、傷だらけになって俺に依存してほしいと望んでいる。

あの太宰も、時間が経ったら消えてしまうのだろうか。その前に、何か美味いものを食わせてやりたい。猛烈に世話を焼きたい。これまで経験したことのない種類のときめきに翻弄されながら、俺は鍋に湯を沸かし、買ってきた渡り蟹の甲羅をばりんと剥いた。

「あ、やべぇ……本物も来るのを忘れてた」

まだ仕事終わりには早いだろうが、この状況を知らない太宰に見られると色々とまずい。説明すればするほど藪蛇になるパターンだ、今日の約束はキャンセルしよう。俺は綺麗なオレンジ色の蟹味噌をスプーンでほじくり返しながら、スマホの音声アシスタントを起動させて、「青鯖にスピーカーフォンで電話」と指示した。「青鯖さんに電話をかけています……」と自動応答した後、しばらくスピーカーからコール音が鳴っていたが、途中で「おかけになった電話は現在…」という不在アナウンスに変わってしまった。

「青鯖に『明日でもいいか？』ってＳＭＳを送ってくれ」

「青鯖さんにメッセージを送信しました」

軽くなった甲羅と脚を包丁で砕いて、オリーブオイルを熱したフライパンで炒める。外殻に艶が出たところで、さっき取り出した蟹味噌に赤味噌を和えたペーストとにんにく、味醂と醤油を投入し、蟹の殻を取り出してから生クリームとブランデーでソースを仕上げた。

リングィーネが茹で上がる前にもう一品作ろう。冷蔵庫から蒸し蛸のパックを出した時、先程送ったメッセージの返信が届いていた。「いいよ」という文字の後に変なキャラクターの「仕方ないな～」というスタンプが続いた。スタンプの趣味に腹がたったが、今は良しとする。

蛸を薄切りにして器に並べ、春菊の葉と玉ねぎとみょうがをみじん切りにしてドレッシングで和えたものを上から載せて、チーズを削って振りかけた。半分に切ったスダチを飾り付けていた時、寝室のドアが開いて、太宰がひょこひょこと杖をつきながら現れた。

なんだろう。太宰の松葉杖姿なんて昔飽きるほど見たのに、きゅぅんと胸が苦しくなる。

「なんだ、寝室まで運んでやろうと思ったのに」

「いい匂いがしたから来ちゃった。リビングで食べるよ」

か、可愛い〜〜〜〜!!!　別に何気ない台詞なのに、庇護欲が嵐のように胸中を吹き荒れる。
ソファーの前のローテーブルに料理を並べて、白ワインを用意する。太宰が通りやすいようにソファーを動かしてテーブルとの間隔を空け、杖を受け取って座らせた。
ありがとう、と優しい声音で言って微笑む太宰にグラスを渡して、ワインを注いでやる。飲んでも大丈夫だったか？とふと気になって尋ねたら、大丈夫と答えた。
自分のグラスにも同じものを注ぎ、グラスを重ねて乾杯しながら、隣に腰をおろす。
「わっ」
俺が座ったソファーの片側が沈み、バランスを崩した太宰が俺の肩に凭れかかった。その拍子に持っていたグラスの中身がこぼれ、履いていたゆったりした素材のズボンを濡らす。
「あぁ……ごめん、中也」
「いや、構わねぇよ。どうせ、腹に入れて出すだけのものだ」
この位置からこいつを見上げるのは今日二度目だなぁ、と昼間の出来事を思い出しながら、ズボンに手を掛けて脱がせてやる。太宰は立ち上がろうとしたのか、しかし支え無しでは難しく、ぷるぷると太腿の付け根を震わせながらまたソファに沈み込んだ。
「――なんだよ、いつからこんなにしてたんだ？」
ぷるん、と全然可愛くない剛直が飛び出し、天井を仰いでいた。ずっと前傾姿勢で危なっかしく動いていたから目に入らなかった。俺がからかう声でそれを指摘して、人差し指の腹でつつ…となぞってやると、みないで、と小さな声で言って、セーターの袖で顔を隠した。
「ああ……なんか、俺ももう、我慢できねぇわ」
ズボンと下着をいっぺんに脱ぎ捨てて、ソファーに座る太宰に跨る。太宰が焦った声をあげた。

「え、ちょ、ちゅうや…！　せっかくゴハン作ってくれたのに…むぐ」
血色の悪い唇に指を押し当ててそれを黙らせ、昼間にも開かれた後ろの穴にすりすりと太宰の亀頭を擦り付ける。
「もう…なんか、中也の指、いい匂いがする……」
そう言って、太宰は俺の指をちゅうちゅうと吸った。さっきスダチを切ってたから、と答えると、それかぁ、と言って目を細める。
「……太宰、俺はさ」
料理ができるようになったってだけで、別に食にこだわりなんかないんだ。
偉くなりたかったわけでも、部下を従えたかったわけでもない。
「う…、は、気持ちい、中也のなか、すごい気持ち良い…っ、」
ただ、欲しい答えをくれた人の下で働き、役に立てたら良いなと思っていただけ。
本当の自分の欲望は、使い途も出番もないから蓋をして仕舞っておいた。時々、誰かがそれを見たいと言うから、差し障りのない部分だけ切り取って、一緒に眺めて遊んだ。
「は、…くッ、そうだろ……もっと、よくしてやるよ…」
亀頭のくびれが何度も前立腺に引っ掛かり、鼻から甘えた息が洩れる。太宰に教え込まれた気持ちいいところを何度も腰を上下させて自らえぐり、きゅうきゅうとナカで締め付けた。太宰が、たまらないという風にくぐもった声を出す。
なんて愛おしい男だろう。昼間のように俺を支配して欲しい、今この時のように、俺なしでは生きていかれないほど依存して欲しい、…ああ、だけれど、いつものように自由で予想不可能な人間でいてくれとも欲している。

「なぁ…、ッ、太宰、俺はおまえの、全部が欲しい……！」
最奥を亀頭でごんっと突き上げられて、目の奥で白い火花が散った。
「あっ、ああ!?　なん、ゃめ…ッ！　ひうぅッ！　は、はいる、はいっちゃ」
突き刺すような動きでペニスが押し込まれる。一番の奥の行き止まりが亀頭でぐりぐりと抉じ開けられて、ずぽっとその先端を飲み込んでしまった。形容できない衝撃で脳がオーバーヒートする。犬みたいに舌をしまえなくなって、口の周りが涎で濡れていく。
「…だめ？　ここに入られるの、嫌い？」
「…きらい、とかじゃなく、…って、あ、ぃぎッッ！　んあぁあ！　まっれ、やらッ」
緞帳が降りては上がる。黒と白に明滅する。真夜中に高速を走っているときのように、光が次から次へ走り過ぎていく。ここはベッドじゃないから、縋るシーツもなくて、太宰のやわらかいセーターを握りしめながら、俺は腹の中だけで絶頂を迎えた。
「っは……やば、締まる……っ」
太宰が短く呻いて、俺の一番奥ではじけた。じわじわと何か熱いものが身体の内側に滲み込んでいくような感じがしたが、もうよくわからない。生理的な涙と涎でどろどろになっていた顔を舐め回されて、口の中を吸われているうちに、酸欠でぼーっとしてきた。
「ん、ぅ、あ、ああっ!?　もうやめ、ぬいて、アッ！　だざぁ…！」
中でゆるゆると動いていた性器が、また固さを取り戻し、ぐぽっ…と奥に入ってきた。
「私の全部が欲しいんでしょう…？　もっと、もっと欲しがってよ…」
何かがおかしいと思った、けれど、えげつないピストンに頭がぶっ飛んで、自分の口から出た悲鳴で思考の断片はかき消されていった。

◇　◇　◇

「おい、太宰。さっきから手が止まってるぞ。仕事しろ」
「事件の報告書ならもう社長に提出したよ」
「探偵社に回ってきた未解決事件の情報の整理は」
「年代別に分けてデータベース化した。目撃情報が多すぎたからキーワードを拾って、信用性の低い情報は非表示にしてる。あっ、検索用の画面に行けば見れるけど」
たぶんこれは一つの事件だよ、気長な犯行計画もあったもんだね、と話しながら昨夜録音した中也の声の音量を上げたら、それを上回る声量で「天変地異か!?」と叫ばれた。
「なに…もう、邪魔しないでくれたまえよ、国木田君。ちゃんと仕事は終わらせたんだから」
イヤホンを片耳だけ外して私がそう言うと、またいつもの盗聴か…と嫌な顔をされた。
「恋人なんだろう。嫌われるぞ」
「恋人も私を盗聴しているのだから、おあいこさ」
「理解不能だ……」
これだからマフィアは、と業界差別的発言をこぼしながら、国木田は私が保存した事件情報のデータベースを読み始める。整理したと言ったが、正確には渡された資料から不要な情報をごっそり削除して並べただけだ。どうせ事件解決後に出す報告書には必要なことしか書かないのだから、あれで十分だろう。無駄な作業はしたくないし、今日は絶対に残業したくなかった。
「はぁ……可愛かった。全部、ぜんぶかぁ…ふふ、うふふふふ……」

中也が私に会えない間に私のファンクラブなんてものを作り、日々その仲間たちと私を隠し撮りしたり盗聴したりしていることは、正直言うと鬱陶しいからやめてほしいのだが、その活動のおかげで中也が私の顔と声にヨワヨワメロメロになってくれて初夜に持ち込めたといういきさつがあり、本気を出してクラブを解散に追い込むようなことはしないでいる。せいぜい「もう本人と付き合ってるんだからファンクラブやめたら？」と定期的に言ってみる程度だ。

しかし、中也ときたら一向にやめてくれる気配がない。最近はもうそれを言うと「……？」と知らない言語で話しかけられましたみたいな顔で見てくる。

私は次第に、中也はひょっとしたら現実の太宰治――私ではなく、写真やビデオの中の、あるいはファンの頭の中だけにいる「太宰治」に恋しているのではないかと不安になってきた。ファンクラブが定期的に開催している会合の場では、毎回必ず私がマフィアにいたころの懐かし画像（前回は拷問風景だった。誰が撮っていたんだ）がプレゼンされて大喜びしているし、私自身は一度も言われたことがないのに、「可愛い」という言葉を連発しているときもある。それは私が松葉杖をついて廊下を歩いている動画だった。恋人が怖い。

「悪いが今回は最高のおさむが手に入ったから…」と言われてデートの誘いを断られたこともあった。どういうことなの!?　私が本人なのだから、私が「最高のおさむ」じゃないの!?

そんな鬱憤が溜まっていたある日、中也の行動予定をハッキングしていたら、鶴見区の倉庫街で構成員の男と二人きりで会うというスケジュール見つけ、中也狙いの奴だったら邪魔しようと思い、その構成員と密会の場所について調べた。

そうしたら、面白いことを知った。その男とはマフィアでは珍しく世間に名の知れた爆弾魔、梶井基次郎であり、彼は組織から提供された研究室で、ある発明をしたということを。

真空チャンバーの中に設置した物質の構成要素をスキャンし、別のデバイスで定義付けを補助してやることによって、物質を自動増殖させる装置。『ビスケット3号』という命名は、ポケットの中には…という歌詞の童謡から取ったのだろうか。1号と2号は失敗作だったわけだ。

とんでもない代物である。あんな倉庫の片隅で生み出して良いものではない、世界がどよめく発明品だと思うのだが、梶井という男がそれを使って日々やっていることは、彼お手製の檸檬爆弾の大量生産だというから、本当に才能の無駄遣いと評すほかない。

中也はこの時期、予算の見直しのために関係者や関係施設を訪問する。梶井はそれを知っていて、中也にプレゼンするためにこの装置を拵えたのだろう。来年度もポートマフィアから研究費の援助を継続してもらうために。

私はその日、明け方まで中也を抱き潰し、思考力を低下させた状態で行かせた。彼がマンションを出た後、盗聴器を仕掛けることを禁じた寝室で、中也から電話がかかってきたとき自動応答する音声を録音した。

「――中也？　どうしたの？」

「――他に誰がいるのさ。なぁに、また何か忘れ物した？」

「――別にいいけど。それじゃ、また今夜ね」

ゆっくり間を持たせて喋り、録音を止めた。もし中也が食い下がって何か言ってきたらボロが出てしまうが、きっと中也は私が電話口にいると分かると、自分からすぐ電話を切るだろう。そういう、彼にとってうしろめたい状況を作るつもりだった。

前もって梶井の装置には細工をしておいた。装置本体の構造はさすがの私にも難解であったので、付属のデバイス側のプログラムを少しいじらせてもらった。梶井以外が装着するとエラーと

認識し、真空ポンプの減圧を停止させるようにしておいた。万に一つ、本当に私が増えてしまうようなことがあったら、この悪戯の収集がつかなくなるからだ。

後は出がけに中也のコートからスマホを掏って、それを忘れ物だと言って届けに行く。舞台装置の業者から購入しておいた砲煙筒で爆発音と白煙を出し、視界の悪い中で中也にぶつかりながら近づき、装置の中から救出されたていでその場を離れる。梶井が私を装置の中に突き飛ばしてくれたおかげで、計画よりずっとスムーズに事を運べた。

あんなガバガバな筋書きを信じる奴が幹部でポートマフィアは大丈夫なのかと思ったが、あの組織がどうなろうと今の私の知ったことではない。中也が組織を追われるようなことになってくれるなら、それは願ったりだ。

私は不満だった。私から告白したとはいえ、こちらが積年の意地とプライドをかなぐり捨てて口説いているというのに、何を言ったって「顔が良い」「声が良い」「写真撮って良い…？」という、ちょっとズレた反応が返ってくる。好意はめちゃめちゃ高い熱量で感じるものの、それは恋愛というより、ファンがアイドルへ向けるような感情に思えた。

自分は誰かのファンになった経験がない。ないから分からないけれど、「ファン」だなんて、自分が中也へ向けている執着に比べて、なんて浅い感情なのかと思っていた。もっと身も心も私によって支配されてほしかった。彼が仲間内で熱狂している「太宰治」という偶像が彼の目前に現れたとき、そんな中也が見られるかもしれないと考えた。

（でも、そうじゃなかった。中也は私をいくつ与えても満足しない）

恋人と同じ顔、同じ声をした生き物が現れて、あと数時間で死ぬと言ったとき、それでもセックスに溺れられる。私を味わってみたいという欲望に抗えない。そんな、私の恋人。

「ふふ、ふっ、ふ……最低……可愛いな……」
今夜は中也をどうしてやろう。あの強欲な恋人は、私に苛められたくて甘やかされたくて、守りたくて傷つけたくて、好かれたくて嫌われたがっている。ああ忙しい、中也に愛されるための努力など必要ないことと引き換えに、私は中也に、私の全てを余さず与えなければならない。
机の上に置いていたスマホの画面がぱっと点灯し、中也からメッセージが届いていた。昨日の仕事が溜まっていて帰宅が少し遅くなるらしい。仕事が終わっていないことは知っているので、「いいよ」と書いてお気に入りのハートのスタンプを送った。

◇　◇　◇

完全に身体がおかしくなっていた。
あちこち熱っぽくて、喉からはほとんど声が出ない。任務の報告で俺を訪ねて来た部下からも心配されて、色んな奴から色んな種類の飴を渡されてしまった。机の三分の一のスペースを占めていたそれらを応接用のテーブルの上に移動させ、適当に一粒だけレモンの形の飴を取って口に放った。思った通り、あまり甘くない味で食べやすい。
昨日はとんでもない一日だった。二人目の太宰とヤッていた途中から記憶がない。朝に目が覚めたら、きちんと寝間着を着てベッドで寝ていた。自慢じゃないが俺は、記憶をなくすほど酒を飲んでも自力で家まで帰れるという人種ではないので、たぶんあの太宰が俺を着替えさせて寝室まで運んでくれたのだろう。時間が経てば死んでしまうと一人目の太宰が言っていたのに、そんなことに時間を使わせてしまったと思うと、悪いことをした、と思った。

というか、あれはそもそも夢だったのではないだろうか？　一晩経って冷静に考えてみると、中に入った人間を増やせる機械を作ることなんて、そういう異能力でもない限り無理ではないかと思えてきた。しかも俺の志向を反映して…という都合の良さ。あれは思春期の少年がエロい夢を見るような類の、俺の妄想だったのではないだろうか？

スマホを取り、梶井の番号にかける。昨日の発信履歴が画面に表示されていた。一人目の太宰が「かけてみたら？」と言ったときのものだ。あのときは野次馬が大勢梶井の研究室に集まって来ていて、俺が事態の収拾を命じたからか、梶井は出られなかった。夢じゃなかった。

五コール後に梶井が出た。昨日はあの後どうしたのかと確認したら、研究室を木っ端みじんに爆破しましたと声高らかに答えた。乱暴すぎるやり方に呆れたが、組織の情報やあの非常識な発明品が転がっていたことを考えたら、まあまあの手だったかもしれない。そうか、とだけ言って、「それで僕の次なる研究の場のことですがぁ――」と話し始めたのを無視して電話を切った。

椅子の肘掛けに両手を置いて深く座り、自分の執務室の風景をじぃと眺める。

「……」

夢ではなかったのだ、全部。

この場所に、太宰がいた。ポートマフィアの首領になり、組織を、俺を、支配する太宰が。

太宰が行方不明になっていた四年間のことを、おさむくんファンクラブでは「沈んだ財宝」と呼んでいる。全員であらゆる手を尽くし血眼になって探しても、その当時の太宰に関する写真の一枚も出てこないからだ。十九歳の太宰、成人になりたての太宰、世間ではまだ大学生の太宰、社会人一年生の太宰……そんな大人と子供の狭間のような限られた時期だけの太宰を、俺たちは見ることができない。

だが、もしあいつが組織に残っていたなら、俺は隣に立ってずっとあいつを見つめていられたのだろう。もちろん、そうなっていたら、俺は口喧嘩も仕掛けてこない太宰の映像を一人で黙々と眺めるような仕事を森首領から命じられることなどなく、自分の気持ちに気づくこともなかっただろうし、太宰は「人間失格」で取り込んだ異能力の持ち主が処刑される度に、寿命を縮めていくことになっただろう。だからこれは、存在しない方が良い未来、妄想だ。

「太宰はあほだ。俺みたいな厄介なファンを恋人にするなんて……」

本人と付き合っているのだからファンクラブなんてやめたら、と太宰は俺に言うが、それは俺にしてみれば、全然結びつかない「だから」なのだ。

恋人になれたことは嬉しい。最初こそ戸惑ったが、恋人にしか見せない表情や態度があるし、太宰と過ごす時間が単純に楽しくもある。しかし、恋人になったから、それと引き換えに他人に対する太宰や、職場での太宰や、一人でいるときの太宰を見られなくなるというのは違うのだ。それでは増えるどころかマイナスである。

自分は、こんな風に誰かを好きになったことがない。気が向いて声をかけた女と付き合ったことは何度かあったが、自分なりに大事にしていたつもりでも、ある日「他に誰か好きな人がいるんでしょ」「愛されている実感が持てない」と詰められてフられる。その度に俺は思う。恋だの愛だのというものは、俺が太宰へ向けている執着に比べて、なんて浅い感情なのだろうかと。自分が好かれなければ好きでいられないなんて、正気か？　好かれているときは自分を好きな推しのことを、好かれていないときは自分に興味を失った推しのことをそれぞれ楽しめよ。熱烈に愛を囁かれていた季節が過ぎ、マンネリ期を経て、ゴミ箱のように性欲処理に使われる。恋人一粒で三倍おいしいじゃねぇか。自分にもそんな未来がやって来るかと思うと期待で泣けてくる。

（太宰はきっと、こんな風に俺を求めているわけではないんだろう。でも、それで構わない）

机の上に置いていたスマホの画面がぱっと点灯し、今日太宰と会う予定の通知が表示された。そういえば、昨日の約束を今日に変えてもらったのだった。楽しみではあるのだが、身体がだるくて太宰を楽しませてやれるかどうかちょっと自信がない。とはいえ、二日連続でリスケは恋人に対して失礼というものだろう。

昨夜自分の部屋に現れた太宰のことを思い出した。猛烈にいけない性癖を刺激してくるたまらない可愛さだった。せっかく寝室ではなくリビングで事に及んだというのに、なぜ俺はリビングにビデオを仕掛けておかなかったのだろう。自分の愚かさを呪う。

「もう二度とお目にかかれないっつうのに…はぁ…録画しておけば良かっ……」

――がたん。と、脳が思いつくと同時に身体を動かし、俺は椅子から立ち上がった。

録画。している。この執務室には。監視カメラ。動揺のあまり思考まで片言になる。幹部専用の執務室内の監視カメラ映像には、その部屋の主と、最高幹部である首領だけがアクセスできる。首領に見られたら死ぬしかないが、必要もないのにご覧になってなどいないだろう。震える指でファイルを開いたら、――あった。残ってる。本人だったら絶対にしてくれないであろう格好でこの部屋のソファーに座っている、太宰の姿。スクショしてＦＣラインに送った。途端に「!?」という投稿が殺到し、何も言わずとも会場と時間の連絡が来た。今日は祭りだ。

この時間からなら夜までには終わるだろう。俺はサーバー上からその動画を退避させ、太宰に少し帰るのが遅くなるとメッセージを送った。優しい俺の恋人は、「いいよ」という返事の後に、変なキャラクターがハートを吐いているスタンプを送ってきたのだった。

おわり

ナカハラ幹部と 3 ばいおさむくん

2020/11/29 発行

繪子（うしろがみ）
Twitter：@EcosanB
Pixiv ID：2660047
HP：http://ushirogami.echo.jp/
印刷：株式会社プロス様

いつもの太宰
ファミマフィア太宰
ムーピックのアクリルボード太宰
3 にんそろって〜、3 倍おさむくん！という本でした
お読みいただきありがとうございました

読んだよボタン（WEB 拍手）→
読んだよ報告にポチポチ押していただけると嬉しいです。

この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。原作者様・出版社様・実在の人物等とは一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載（SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む）を禁じます。処分する際は同人誌専門の中古書店に売却していただくか、中身が分からない状態にした上で可燃ゴミとして廃棄してください。